
バイキン仲間にさようなら！

松葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイキン仲間にさようなら！

【Nコード】

N0122B

【作者名】

松葉

【あらすじ】

容姿端麗、文武両道。これでオタクで腐女子で末期のBLスキでさえなければ完璧な少女 弓原香歩。叔母に脅され入った先は、美形揃いの生徒会！生徒会メンバーカップリングに妄想をたくましくする香歩であった……。警告カテゴリBLですが、全年齢対象ですので、期待せずにドウゾ。恐ろしく筆がトロいですが、オチまですべて決まっていますのでいつか完成するかと。orz

プロローグ

薄暗い部屋の中で、パソコンのディスプレイが放つ青白い光だけが、その部屋の主を浮かび上がらせた。

女である。まだ若い。少女と言える年齢だ。

しかし、今やその女の顔には歓喜の色が浮かび、口をいびつにゆがめて「うふふふふふふふふ……」という奇声を発している。笑い声らしい。

女は、手元も見ずに、驚くべき早さでキーボードをたたきまくる。意味のない連打ではない証拠に、ディスプレイには次々と新しい文字が生まれていた。

+

「……あっ……」

思わず口をついた嬌声を、ユウが呑み込むように堪えた。

遠く、教室の外から、幾人かの笑い声がする。

「我慢するなよ」

アキラが薄く笑うのに、ユウが唇を噛みしめながら首をふる。

その頬が赤く染まっているのは、無論、窓から教室の中へと差し込む夕日のせいだけではない。

「……だめっ……誰か 来たら……っ！ んっ……やあ……」

ユウが身をよじって抗議の声をあげるが、その仕草すら、はだけた胸元を更に露出させる手助けにしかたない。

「だめ？　ここはもうこんなになってるのか？」

かすかに熱を帯びた声で耳元にささやかれ、びくりとユウの肢体がはねあがる。

アキラの手が、たった今までもてあそんでいた平らな胸の頂から滑り落ちる。優しく、それでいて傲慢にも思える指先が腹をなで、その下に届いて――

+

「ほおう。香歩^{かほ}は、ボーイズラブ^{こーゆーの}が好きなのか」

びびびび、と雷に打たれたかのように、香歩と呼ばれた少女が痙攣した。

景気よくキーボードを叩いていた手が硬直し、怪しげな笑みはひきつり笑いに変化している。

条件反射のようにウィンドウズアイコン＋Mのショートカットキーで全ウィンドウを最小化するものの、タスクバーにはばっちり『アキラ×ユウvv』……とか書かれていてすべてが台無しだ。

「ゆ……友希^{ゆきの}乃叔母さん。何の話ですか？」

つとめてにこやかに言うものの、香歩の声はかすかに震えている。

友希乃と呼ばれた妙齡の女性も微笑んだ。

こちらは完全な笑顔だ。

「アキラの手が、たった今までもてあそんでいた平らな胸の頂から滑り落ちる。優しく、それでいて傲慢にも思える指先が腹をなで、その下に届いて――」

「ぎゃ」

っ！！」

一瞬で暗記したのか、スラスラと暗唱する友希乃に、香歩が身も世もない悲鳴をあげた。

香歩は耳まで赤くなつてぎゃー、ぎゃー！ と女の子らしからぬ叫び声で騒ぎ立てる。

何というか、好きな子の縦笛舐めちゃったのを目撃されたのに匹敵する恥ずかしさらしい。

「うるさい」

「……はい」

わめきたてる姪を、友希乃が一言で黙らせた。

流石は弓原友希乃。

香歩の叔母にして、香歩が先日転入した私立梅華^{ばいか}高等学校理科教師。美しい容貌と人を人とも思わぬ真性のサド体質から『雪の女王様』なるあだ名もあるという。

香歩は、友希乃と暮らす数日でよくよく理解した。理解せざるをえなかった。

曰く、この人に逆らつてはいけない。

そもそも、何故に叔母と姪が共に暮らしているのかと言えば、要するに両親の転勤というヤツで。

しかし何としてでも日本にいたかった香歩は だってボーイズラブのもっとも盛んな地はどこだと思つてるの！？ とは香歩の言だが 転校をしてまで日本に残ったのだった。

すなわち、その香歩の引取先が、母の妹である友希乃の家だった

という訳である。

（ 失敗だったかな ）

香歩はだらだらと嫌な汗をかきつつ思った。

香歩とてボーイズラブが、身内に対しおおっぴらにカミングアウトして好まれるモノではなく、ましてや書いているだなんて知れたら白眼視されるのはよく承知している。

欧米に比べれば同性愛を禁じるキリスト教の縛りが薄い日本では、同好の士も多く、また仲間も集めやすい。

昨今のブームでにわかファンも増えたと言えるだろう。

それでも、まだボーイズラブはマイノリティであり、秘すべき趣味の類だと香歩は思っている。

要はエロ本とかエロビデオと同じだ。おおっぴらに置かれ誰もが購入できるが、同好の士以外には自慢にならない。

それがこんな形でバレようとは香歩も考えていなかった。

（ やっぱりてつとり早くネットとかでボーイズラブ仲間作って、空輸で手を打つべきだったかな？ ）

香歩は、以前海外の同好の士は、空輸でもってボーイズラブ本を読み漁るのだと何かで読んだことがあった。

（ いや、無理だわ！ 空輸しようにもお金がない……っ！ ）

彼女の小遣いはすべて、膨大な量のボーイズラブ本やグッズに捧げられている。

ぐるぐると忙しく思考を巡らせる香歩を見て、友希乃がにっこり

と笑った。

「ふっふっふっ。このことをまわりにバラされたくなければ、私の言う事を聞きなさい！」

人の弱みにつけ込む事に、いつぺんのためらいもない人種である。うっかりそんな人に弱みを握られてしまったのが、香歩の運の尽きだった。

弓原香歩。 15歳。 高校1年生の夏であった。

第1話 生徒会へようこそ！

彼女にとって、この世は3種類に分けられた。

すなわち、

同性しか好きになれない男。

異性も好きになれる男。

おんな
脇役。

こういう言い方もできる。

男性には3種類しかない。

せめ
攻。
うけ
受。
リバーシブル
両方。

……端的に言って、彼女
キ
家だった。

ゆみはら かほ
弓原香歩は、かなり重度の同性愛愛好

+ + + + +

「なんで私が生徒会なんかに入らなきゃいけないのよっ！」
とは、香歩の言だが、友希ゆきの乃の目の前で言えないところに、如実

な力関係が見える。

彼女がいるのは、生徒会室前だった。会議は既に数分前に始まっている予定だが、香歩が遅れたのは何も望まない約束への意趣返しではない。

基本的には、真面目で律儀な性格の彼女のこと。きっちり時間通りに行こうと思ったら迷った。要は方向音痴なのであった。しかし、それが部屋へ入りづらい状況を作り出している。

「こういう時は妄想よ！ 妄想で元気を出すのよ！」
色々間違っている。

が、彼女に限っては有効だった。

やっぱり、生徒会と言うからには、会長は小さくて童顔で天然な姫受っ！ で、彼をめぐって幼なじみの爽やか青年と、手練手管にたけた百戦錬磨の両刀副会長が争うのよ！

香歩のテンションがあがった。

やっぱり必須は鬼畜攻な顧問！ 2巻目くらいからは、同じく学園のアイドルの小悪魔受美少年（実は腹黒）とかも登場するのよっ！

「よしっ！」

いきおいのまま、香歩は扉をノックして素早く開けた。

+

生徒会のメンバーが時間ぴったりに集まるのは珍しかった。

普段は、先生から押しつけられた厄介事やら部活やら私事^{デート}やらで、遅れたりサボったりなかなか会議が始まらないのが常だ。

今日に限って、早々に皆が集まった理由は至極簡単。校内一の美女と名高い弓原教諭の姪であり、本人も美少女と噂の弓原香歩が、特別措置として生徒会に入る事になったからだった。

興味本位ともいう。

夏に転校してきたばかりで、未だ数日しか学校に通っていない彼女への措置は異例中の異例だったが、そうせざるをえない事情があった。

人手不足。

代々生徒に持たされる権限の大きい梅華高校の生徒会は激務で知られる。

自由度の高さと引き替えに、学校の意向を汲む思慮深さと、忙しさにかまけて学校の勉強が疎かにならないだけの成績が求められる。生徒会メンバーとして立候補する際、教師の推薦が必要なのは、それを配慮してのことだ。

が、近年では熱意ある若者などという過去の遺物は消え去り、もっぱら教師から白羽の矢を立てられた生徒がその任にあたっていた。

それすらも生徒の「やる気がないので」の一言に阻まれ、今では入学したての新人生やら、受験を控えた3年生にまでお鉢が回ってくる始末。

2学期始まってすぐの今現在、生徒会メンバーは1年1人、2年

2人、3年1人の計4人。最盛期の半数以下しかいないのであった。

それを危惧した教師陣が狙い定めたのが、弓原香歩。

転入試験を優秀な成績で突破し、転入試験に落ちたら海外転勤に着いていく事になっていたので、香歩が死に物狂いで頑張った結果な訳だが、人柄も弓原教諭のお墨付き。

血縁の強みで無理矢理本人の了承をもぎ取ったのだとか。

が。時間になっても彼女が来ない。

さては、強制的に任命された生徒会が嫌になつてのボイコットか、という考えが全員の脳裏によぎったあたりで、扉がノックされた。

「失礼します！」

という、その涼やかな声音には不釣り合いな程元気なかけ声と共に扉が開く。

入ってきた少女、香歩だが、を見て、全員あつけに取られた。

デザインが可愛い事で有名な女子制服が野暮ったく見える程、整った顔立ちをしていた。

後ろ髪を背に長く垂らし、前髪をまっすぐに切った髪は、黒。

色の対比でより白く見える顔は、「可愛い」とか「綺麗」、というよりは「整った」というのが似合いの、今風ではないがバランスのよい容貌。

髪型も相まって人形のようなだが、そう言い切るには生気が溢れすぎている。

グラマーとまではいかないが、スタイルも良い。制服のフレアス

カートからは、すらりとした足がのぞいていた。

これでオタクな腐女子ふじょしでさえなければ完璧な少女　それが弓原香歩だった。

+

香歩の方も、扉を開いて中を見るなりあっけにと取られた。友希乃から、美少年揃いだぞー！　と聞かされていたが、これ程レベルが高いとは思わなかった。

端から順に、鬼畜攻、流され受、総受、へたれ攻、と勘で分類する。

生徒会の面々が我に返るより、香歩が分類を終えて正氣に戻る方がやや早かった。

「遅れてすみません。道に迷っちゃって……」

言いながら、はにかむように微笑む。その脳内では妄想たくましい。

鬼畜攻×総受、へたれ攻×流され受かな？　いや、後者が

弱いか……なら鬼畜攻×流され受、へたれ攻×総受……あ、いいかも！

「君が弓原香歩ちゃん？」

生徒会メンバーの中で真っ先に我に返ったのは、香歩のいう所のへたれ攻　もっとも年長の支倉はせくら昂すまゐだった。

「はい。1年の弓原香歩です。突然の事でどこまで頑張れるか分かりませんが、よろしく願いしますー！」

香歩がぺこりと頭を下げる。

それに笑顔で応えた昴が、自己紹介する。

「オレは3年の支倉昴。前会長で　今は自称文化部長」

につこり笑顔のまま、香歩が器用に疑問符を飛ばした。

自称？

「会長補佐とか、アドバイザーみたいなものですよ」と、フォローを入れたのは、香歩いわく総受。

やっぱりへたれ攻×総受！

と、至極失礼な事を考える香歩。

「僕は1年の桜田直樹さくらだ なおき。会計です。よろしくお願いしますね」

敬語キヤラ来たっ！

「よろしく願います」

浮かぶにやにや笑いを必死に押さえながら、香歩は総受……もと
い直樹の隣に座る流され受に視線をやる。

「2年高遠たかとお 譲ゆずる……書記」

よろしくの一言もない無愛想さに、香歩は決してメゲない。

無口朴訥系来たっ！　絶対剣道か弓道か空手が柔道やって

るっ！　イチオシは弓道！

偏見だった。

「高遠先輩は剣道部の主将もやってるんですよ」と、直樹。偏見も案外当たるから侮れない。

ニアピンかあ……でも主将は美味しい……。

もわもわと浮かぶ妄想にふけりかかり、慌ててそれを追い払う。

不審に思われてはいけない。

BLは秘すべき物。特にナマモノは本人達にバレないのが必須条件だ。

香歩の中でスイッチが入る。

こんな美味しい条件逃してなるものかつ！　これは美男子が乳繰りあう（妄想）のを見るベストポジション！

その為には、決して香歩がオタクと……ましてや腐女子とバレてはならない。

そして地道に男同士の親密度を上げて、リアルカップルにつ！

香歩の大いなる野望が歩き始めた瞬間だった。

「……それで、えつと……」
心に熱い闘志を秘めて、香歩が最後のひとり　鬼畜攻に向き直る。

「俺は2年の秋本京弥。あきもときょうや会長だ」

京弥がまじまじと香歩を見る。

「おまえ、俺の女になれ」

そして、手垢のつきまくった科白を吐いた。

俺様！　俺様だこの人！　やっぱ鬼畜攻じゃん！

別の意味でひとしきりときめいた後、香歩は昂に向き直り、聞い

た。

「で、私の役職と仕事は何になるんですか？」

告白、普通にスルー。

「……………ぶはっ！」

妙な声をあげて、昴が吹き出した。

見れば、譲と直樹も多かれ少なかれ肩を震わせている。

京弥が、いまだかつて受けたことのない屈辱的な仕打ちに凍り付いていた。

香歩は、こくりと首を傾げる。

何か変なことを聞いただろうか？

香歩にとって男はすべて同性愛者であり、恋愛の範疇外だった。才色兼備な香歩のこと。告白された数は数えきれないが、すべての告白を本気に取ったことは一度もない。

香歩にとって告白は、世間へのカモフラージュであり、すべてのカップルは偽装カップルだった。

だから、京弥の告白？も香歩にとっては普通にスルーする程度のことだった。

「あははは！ いやいや大丈夫。香歩ちゃんみたいな子なら大歓迎だよ！」

昴が笑いながら請け負う。

「弓原さんは副会長です　　って言ってもただの雑用ですけどね」
直樹が科白を引き継いで、そのまま副会長の仕事内容　要約すると本当に雑用だった　　を説明する。

勧められた椅子に座り、メモを取りつつ神妙に話を聞く香歩を見ながら、京弥が低く呟く。

「弓原、香歩……」

+

友希乃が職員室で化学の試験の採点をしているところに、生徒会顧問の教頭がやってきた。

「弓原先生。本当に大丈夫なんですか？　姪御さんを生徒会に入れて」

「香歩なら平気でしょう」

頭髮と同じく胃壁も薄そうな教頭に、振り仰ぎもせず友希乃が答える。

次いで、小さく呟く。

「アレは男を恋愛対象に数えてないから」

「何か言いましたか？」

「いえ、」

友希乃がようやく教頭の方を向いた。

「香歩は、前の生徒会役員のように秋本に惚れて捨てられて自暴自棄になったり、高遠が好きすぎて私物盗もうとしたりは絶ッ対にしませんから、ご安心ください」

実はその辺りも、生徒会の人数が極端に足りなかったり、香歩が

特別措置で副会長になった理由だった。

「でも、あの2年の女子学生の例もあるじゃないですか」
教頭はまだ心配そうに続ける。

「そちらもご安心を。香歩は親衛隊だかにいじめられて凹むような性格でも、暴力に屈するようなタイプでもありません」
それに、と艶然と笑んで友希乃が続ける。

「私の親戚と分かって手を出す勇氣のある生徒はまだいなさそうですしね」

なんか、怖かった。

+

【鳥かごブログ】

月×日（ ）

こんばんは。小鳥<sup>「コ」
「ニ」</sup>です。

女王様の命令で某所へ出頭させられました。

嫌々行ったら……天国じゃないですかっ！
腐女子の天国ですよー！

あれは絶対鬼畜攻、へたれ攻、流され受、総受と見たっ！
思わず家帰るなりSS書いちゃいましたよー！

鬼畜攻×流され受っ カテゴリSSをご覧くださいー！

++++

【（独断と偏見に満ちた）用語解説】

ボーイズラブ……略してBL。ホモというのは差別を含む表現なので使ってはいけない（らしい）一般的に学生（20代程の男性カップルを主人公にした恋愛モノライトノベルを総称するが、最近は一マンモノ、オヤジ主人公など、主人公が若いとは限らなくなり、幅が広がっている。昔は色々乙女にごまかされていたが、最近は成人男性コミック誌ばりの挿し絵や漫画が普通に売られている。JUNE系、耽美系などに同意義。個人的にはファンタジーの1つだと思っている（だってあり得ないでしょ出てくる男キャラ総同性愛好者って）

腐女子……BLを好む女子の総称。特定の年齢を越えたり、レベルアップすると貴腐人になるらしい。

JUNE……BLの古参有名雑誌。

攻……実も蓋もなく言うときやる方。精神的にそうである場合も言う。

受……実も蓋もなく言うときやられる方。精神的にそうである場合も言う。

両方……攻も受もOKな人。攻と受をひっくり返してもカップルが成立する場合にも言う。

× ……カップリングの標準表記。先に書かれた方が攻。後に書かれる方が受。男女カップリングでも使う。英語圏では／（スラッシュ）を使用。

姫受……お姫様のよーに周囲から愛される受。かなり女性的に描かれるケースが多い。

両刀……男も女もどっちも大丈夫な人。

鬼畜攻……ドSだったり言葉責めが激しかったりの攻の人。

小悪魔受……小悪魔な性格の受。もっぱら自分の可愛さを自覚している。

腹黒……腹の中が黒い人。眼鏡だったりいつもニコニコしていたり真面目そうだと腹黒率が高い。

流され受……そっち属性じゃないけど、流されるままに受になる人。

総受……誰に対しても受になる人。

へたれ攻……甲斐性のない攻。これはこれで萌える。

脇役^{おんな}……BLの世界においては女性などあつてなきがごとし。

ナマモノ……実在する人物を元にしたBL。有名どころではジャーズなどがあげられる。本人達に知られないのが必須条件。

SS……こちらをご利用の方にはもはや言うまでもないかと思いますが、

ショート・ショートの略。短編の同意義。

鳥かごブログ……ヒロイン・香歩のブログ。日記兼BL小説公開場。
HNは小鳥。

第1話 生徒会へようこそ！（後書き）

．．．アトガキ．．．

用語解説を付けたら非常に長くなりました……。

3話くらいまで書いてたのですが、あまりに冗長なので思い切って仕切り直しっ！

ついでに用語解説がついたり、気づいたらヒロインが完璧超人になったりしますが気のせいです（え

気づいたらついでに、ヒロインがただの腐女子から、オタク腐女子になってるのも気のせいです。

ちなみに、梅花高校の女子制服は、セーラータイプのワンピース（裾はフレア）。

男子制服はエ ミン（ばーい女神異 録ペル ナ）男子制服似という設定。

第2話 副会長にご就任！

近ごろ香歩^{かほ}は実に精力的に働いていた。

親から申し渡されている、日本残留条件の好成績維持を筆頭に、生徒会の仕事にも意欲的に取り組んでいる。

中でももっとも力が入っているのがブログの更新で、それはもう新ブログの女王もかくやという勢いでの更新なのであった。

内容は主に妄想。具体的には生徒会メンバーを主人公にしたBL SS。

それはもう、生徒会の仕事に意欲的にもなる訳である ネタ探しのためだ。

例えば。

「今度の梅華祭^{ばいかさい}のことですけど、企画申請締切が昨日でした。集計した所、いくつか企画被っている団体がありましたので、明日の昼休みに各団体の代表を集めようと思いますが、どなたかお願いします」

議題の用紙を見ながら、直樹^{なおき}がすらすらと言う。

「じゃあオレが議長やるよ。議^ぎと直樹^{ちき}が立ち会いで良いか？」
間髪^{まは}入れずに昂^{さか}がまとめる。

名前呼び捨てっ！ しかも息ぴったり！

「はい。昂先輩お願いします。次に梅華祭予算会議の日程ですが、来週水曜の昼休みで良いでしょうか？」

直樹が京弥きょうやを見て言うのに、京弥が興味なげに頷く。

名前＋先輩呼びっ！ アイコンタクトはやっぱり愛？ それとも名前＋先輩呼びへの嫉妬？ あ、それ良いわ！ 三角関係ねっ！

万事この調子だったりした。

が、萌えるのに忙しかった香歩も途中でこの会議が何か変なことに気付く。

無口属性で、議題や会議内容をパソコンに打ち込むのに忙しい譲はともかく、京弥がまったく発言しない。

直樹が議題を読み上げ、昴が采配するのが主で、京弥は何か決定事項がある場合首肯するのみなのである。

「とりあえず、この辺りでしょうか？」

「うん。後は来週でも良いんじゃないかな」

「弓原ゆみはらさんは、何か疑問とか質問とかありますか？」

直樹が問う。

「弓原先生と紛らわしいから香歩で良いですよ」

そう告げてから、疑問を投げ掛けた。

「無口な高遠たかとお先輩は分かるんですけど、何で秋本あきもと先輩は会議に参加しないんですか？」

直球ストレート。

無口とか言われて、譲が密かにショックを受けていたが、事実なだけに本人含め誰も何も言えない。

「京弥は、心が狭いから男とは話したくないんだって」

さらつと昴が説明する。さり気なく悪口だった。

「それは本当に心が狭いですねえ」

「……先輩、くだらない嘘つかないでくれます？ おまえも信じるなよ香歩」

香歩まで同意するのに、京弥が流石に抗議の声をあげた。

「でも、秋本先輩、この間野郎の携帯番号とアドレスなんて登録したくないって言ってたじゃないですか」

「生徒会メンバーのは登録してるんだから、文句ないだろうが！」
まぜっ返した直樹に、京弥が怒鳴る。

野郎の携帯番号とアドレスなんて登録したくない 生徒会メンバーのは登録してる「生徒会メンバーは特別……つまり、生徒会メンバーが好き！」

かなり飛躍した三段論法で香歩がときめいた。

「俺はこんなくだらない会議に出るのが嫌なんだよ！ どうせ決まり切ったことなんだから、勝手にやりやいいだろうが」

「それだと、今は昴先輩がいるから良いですけど、来年以降困るじゃないですか」

思わせぶりに直樹が微笑む。

「それに、そう思うならいつも通りサボれば良いのに、なんでそうしないんですか？ もしかして」

言葉の先を察して京弥が慚然とした。

「もしかして、会議に出たい理由でも“いる”んですか？」
微妙な言い回しに、香歩がぴくりと反応する。

それはもしかして、秋本先輩の好きな人がこの場にいる？

香歩の心拍数が跳ね上がる。思わずぎゅっと拳を握り締めた。

誰、誰っ！？ 支倉先輩？ 高遠先輩？ それともやっぱり

桜田くんっ！？

見事なまでに自分は計算外。心の底からBL好き。
それが弓原香歩だった。

+

「一目惚れに1票」

唐突に、昂。

即座に意を汲んだ直樹が続く。

「僕は単にプライドが傷ついたに1票。高遠先輩はどうですか？」

「……一目惚れの方」

室内に香歩と京弥はいない。

京弥はなんかムカついたので。香歩はBL本新刊の発売日だったので早々に退出していた。

「1対2ですか。不利ですねえ」

まるでそう思っていない口調で直樹が言う。

「どちらにせよ」

珍しく譲が自分から発言をする。

「会長がきちんと会議に出てくれるのは助かる」

……一同、強く同意した。

+

後輩の女生徒とのデートをすっぱかし 生徒会の会議に出た段階ですっぱかしは確定だった訳だが、京弥は街中を歩いていた。目的地は特にない。

考えているのは先刻の生徒会の会議のこと。

自分が声をかけても、なびくどころか動揺のひとかけらすら見せない女。それが弓原香歩の印象だった。

気になってはいる。

その意味で直樹の言ったことに間違いはない。

ただし、直樹の考えているような意味ではない。

「くそっ！」

なんか、イライラした。

ふつと顔を横に向ける。なんということはない動作だったが、実にタイミング良く見つけてしまった。

弓原香歩が、書店に入っていくところだった。

+

香歩はつきつきと書店に入り、目的のBL新刊を手にする。コーナーの位置も、手に取る本もわかっている。動作に迷いはない。新刊小説とコミックスを片手ではつかめない程度積み上げ、胸に

抱えて普通の小説コーナーに向かう。

こちらは丹念にタイトルと作者をあらため、BL要素があると噂の小説を選び出す。

一部の作家は作家買いする。あらずじなど見なくてもどうせ耽美の皮を被り、普通の小説に偽装したBL小説に決まっているからだ。それから、興味をひかれるタイトルや表紙の本を手にしては、あらずじを見返し、直感で購入・様子見・不購入に分ける。

香歩の場合、この直感が外れることは滅多にない。

名付けて、BLアンテナ！

ついでに参考書でも見るかと柄にもなく愁傷な気持ちになり、参考書の棚に向かう。

しかし、元をたどれば成績を気にするのは日本にいる為であり、日本にいたいのはBL本を読むためだ。突き詰めれば香歩の行動理由の大半は「BLスキー」の一言で理由がついてしまう。

「おい」

数学の参考書を手にかかった時、突然声をかけられた。思わず無防備に振り向いてしまう。

秋本京弥。

香歩は器用にも赤面と蒼白を同時にやってのけた。

瞬時にまたもとの方を向き、抱えた本の背表紙を自分の体に押しつける。一番上にもっとも当たり障りのない小説を乗せ、抱えた手を下に下げた。

香歩より身長の高い京弥は、これで一番上の小説の表紙しか見えない、と香歩は読んだ。

それからゆつくり振り返る。

「きつ……きぐうでね」

ドモった。

京弥にすれば、香歩の行動は予想外で、見慣れた動作だった。

京弥が声をかけた女生徒は、瞬間自分が声をかけられた驚きに身を震わせ、緊張と興奮で蒼白になったり赤面したりする少女はよく見る。

とつさに後ろをむいて、表情を取り繕い損ねるのも見たことがある。

しかし京弥は、そんな反応を香歩がしたことに驚いた。

「奇遇だな」

「秋本先輩は、参考書を買いに来たんですか？」

言ってから、香歩は失言に気付いた。今のは「秋本先輩『も』、」
と言つべきところだ。

「お前は違うのか？」

嫌なところをつつこまれて、香歩は苦し紛れに切り返す。

「秋本先輩も違うんですか？」

単に香歩を追い掛けてきただけの京弥に、この科白は酷く効いた。

「まあそんなところだ」

どんなところなのかよく分からないが、曖昧にごまかし、京弥は話題転換の口実に参考書を手に取る。

「この参考書が、分かりやすいぞ」

同じく話を反らせたかった香歩は是非もない。

「そうなんですか？ そのシリーズ解答がページ下にあるんで、なんとなく嫌なんです」

「わかる！ 俺もなんとなく嫌なんだ」

共感に、思わず京弥の口元がほころぶ。

「でもこの本は試験形式だから解答は最後に」

続けかけて、京弥の科白が途切れる。先程の比でなく香歩の顔が真っ赤に染まったからだった。

香歩がはつとして顔を背け、口元に手をやる。

「すみません……」

消え入るような声で香歩が謝った。

それから、うるんだ熱っぽい瞳で京弥を見上げる。

「秋本先輩って優しいんですね」

京弥の方が赤くなってしまつような美少女ぶりだった。

しかしもちろん成分の9割がBレスキーでできている香歩のこと残り1割が水やたんぱく質などの人体の構成成分だ。

『もちろん』京弥が一瞬誤解したような意味で赤面したのではない。

京弥の笑顔に思わず、という意味では発端は同じだ。しかし、笑顔を見てから赤面に至るまでの過程を京弥が推し量ることはできなかった。

今のっ！ 今の笑顔は、私でなく是非桜田くんに向けてほしかったっ！

言うまでもなく、香歩の脳裏には自分に都合が良いおめでたい薔薇の花が咲き乱れていたのだ。

それで、参考書を買ったふたりは、気恥ずかしさに目をそらしつつ、どちらともなく秋本先輩の自宅に向かい勉強することを言いだし、何故か折よく両親が不在で、つ……ついにふたりは……っ！
きゃー！！

この間約2秒。

妄想と興奮で頭に血がのぼり、思わずヨダレが垂れそうになる。

はっと気付いて慌てて顔を反らし、口元をぬぐう。
結構危なかった。

謝罪を述べつつ、まだ興奮と妄想覚めやらぬ顔で京弥を見つめた
というのがことの真相。

京弥をうつとり眺めつつ、香歩の脳内では京弥や直樹があらぬことになっている。具体的には「あつ……先輩、だめっ」みたいなそんな感じ。

香歩の脳内で、妄想の京弥がそんなことを言っても体は正直だ的なお約束科白を吐いている頃、現実の京弥は、真剣に戸惑っていた。
ホンモノ

告白？は丸ごとスルーの癖に、京弥を好きな女生徒のような仕草を見せる香歩。しかも今は、京弥を妙に艶っぽい視線で見つめてくる。

こんなタイプは初めてだ。
興味がわいた。

あるいは子どもっぽい独占欲や支配欲なのかもしれないけれども。

これが一番最初のきっかけ。

しかしその時香歩は、妄想をしつつも「先輩早く帰らないかな。BL本買えないじゃん」などと、いたく失礼なことを考えていたという。

合掌。

+

【鳥かごブログ】

月 日 (×)

こんにちは。小鳥コトリです。

ああ、もう毎日たまりません……。

はあう……天国です！

今日はもうネタ思いつきまくりですよ！

次の会議の日が待ち遠しい……。

帰り際にBL本と小説購入！

読み終わったら感想レビューします。

本屋に行ったら、偶然知り合いに会ってしまいドキドキ（別の意味で／笑

BLを知られる訳には行きませんよっ！
本人をネタにしてるなんてバレる訳にはっ！

+ + + + +

【（独断と偏見に満ちた）用語？解説】

かなり飛躍した三段論法…… BLスキーには必須技能。

耽美の皮を被り、普通の小説に偽装したBL小説…… 長野まゆみと
か三浦しをんとか。大好き。

BLアンテナ…… 父さん妖気です！

抱えた本の背表紙を自分の体に押しつける。一番上にもっとも当たり障りのない小説を乗せ…… 書店ではよくやります。いや、表紙がね。最近のは表紙が特にね。

成分の9割がBLスキーでできている…… 腐女子はほとんどがそう
だと思いますが、何か。

具体的には「あっ……先輩、だめっ」みたいなそんな感じ…… 京弥
×直樹。

第2話 副会長にご就任！（後書き）

．．．アトガキ．．．

所謂、好きになっただきつけ編。
更新頻度激遅ですが、すみません。

次回は、香歩に仲間が出来ます（え

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0122b/>

バイキン仲間にさようなら！

2010年10月12日01時43分発行